
サイボーグガール～もっとエコしましょ！～

ぱじゃまくんくん男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイボーグガール〜もつとエコしましよ！〜

【Nコード】

N5566T

【作者名】

ぱじゃまくんくん男

【あらすじ】

ある日突然、美少女サイボーグのアヤコがアイドルオタクのユキトのカノジョになった。少し気が強くて、ファッションセンスがぶっ飛んでいて、目から光線を出しちゃうけれど、料理は上手だし掃除もしてくれる。ユキトのくたくたな人生は一変した。しかし、アヤコがサイボーグとして開発された理由、それは……。

BOY MEETS GIRL

ユキトはくたくただった。

冬の冷たい風は街路樹の裸の枝を抜け道としてひゅうひゅうと鳴き、しおれた朽ち葉が幹線道路に舞い上がっていた。

大型トラックがエンジンをうならせながら、ユキトのエンドウ豆みたいな顔にライトの光線をぶつけていっては、去り際のついでに排気ガスをあびせていく。

ユキトはごほごほとむせかえった。

泣きっ面に蜂。

仕事でさんざんだったというのに、そこから解放されたあとも、このありさま。

「ハア」

エンドウ豆みたいな顔の中のゴマ粒みたいな目を夜空の月に持ち上げて、ユキトは泣きたくなった。寒風は嵐のような強さなのに、はるかかなたの頭上に浮かぶ月は、地上の喧騒をよそに微笑みを浮かべているような輝きだ。

郷里で眺めた月となんら変わらない。でも、東京の夜空を染めるそれはいつそう遠くの空だった。

東京にいれば、アイドルにすぐに会いに行ける。単純な動機で求人雑誌をめくり、住み込みで働ける職場を探した。

辿り着いたのは大田区の新聞販売店。

想像していたようなタコ部屋ではなかった。一般的な賃貸マンションが従業員個人に割り当てられ、家賃はすべて会社負担である。給料も良かった。月に百万円近くを稼いでいる配達員もいるらしく、それは誇大広告でもなんでもなくて、事実だった。

ただ、契約を多く獲得した場合による。

ノルマは厳しかった。一日に一件の新規契約が当然とされていて、口下手アイドルオタクの素人童貞であるユキトがノルマを乗り越え

るにはひどく厳しい断崖だった。

しかも、朝二時から六時まで配達のための時間。正午十二時から十四時までが勧誘の時間。十四時から十七時までが夕刊の配達。十七時から二十時までが再び勧誘の時間。

勤め先の新聞販売店から寮までの、たった二百メートルの家路を辿るユキトの足取りは、奴隷の足取りであった。

店長にさんざん叱られた折れかけの心を引きずったまま、二時にはまた目覚めなければならぬ。

つらい。

「あつ」

しかし、ユキトはふいに思い出した。たしか、大好きなアイドルグループ「チョコレート」のライブDVD、「もっとエコしましょ！」が、今夜届けられるはずだ。

ユキトは月夜に一人、笑みを浮かべた。待ちに待ったオリカ様のハッスルキュートなスマイルがコマ送り再生でまじまじと眺められるときがやって来たのだ。

それに、三か月前の「もっとエコしましょ！」ライブをユキトは観覧している。十一曲目の「エコする乙女〜地球はひとつ〜」でのオリカ様ソロで発した合いの手の「ハッスルキュートなオリカサマっ♪」コールは、多分、ライブハウスで一番の大声だった。

もしかしたら、自分の声も拾っているかもしれないと思い、ユキトの心は躍った。

ユキトの足取りは鎖から解き放たれた奴隷のように軽やかになった。

と、そのとき、ユキトのきつたないスニーカーのつま先が何かを蹴飛ばした。小物だった。くるくると回転しながら歩道の上をすべっっていく、どうやら携帯電話だった。

ユキトは拾い上げて、携帯電話をまじまじと眺めた。重たくて角ばっている古い機種である。

液晶画面が真っ暗だったので、ユキトは電源を入れようとしたが、

ボタンを押し続けても液晶ランプはいっこうに光らなかった。
足蹴にしたはずみで壊してしまったのかもしれない。

とりあえず、ユキトは携帯電話を持ち帰った。運送会社が投函していた不在票の電話番号にかけて、DVDを持ってきてくれるよう頼むと、拾ってきた携帯電話のSIMカードを抜いてみた。

自分の携帯電話と同じキャリアだったので、差し替えてみる。電話帳や住所のデータが登録されているかもしれない。わかれば、電話帳の連絡先をつてに持ち主に返してやろうと考えた。

電源を入れる。

液晶画面が立ち上がると、素人童貞のユキトは背筋をびくつとさせてしまった。待ち受け画面はこちらが赤面してしまうほどに可愛いらしい女性のダブルピースだった。

「ガッキーみたいだ」

ユキトは見とれてしまう。しばらくして、首を横に振って正氣に戻る。おそらく、この携帯電話の持ち主は男だ。この女性は交際相手なのだろう。自分の顔写真を待ち受け画面にする人は滅多にいないはずだ。

見とれていた時間も束の間、持ち主の男に嫉妬してしまう。

おもしろくない。下手をすればオリカ様よりも可愛い。

まあいい。こんな携帯電話など不燃物ゴミとして明日の朝にでも出したいところだが、持ち主に返さなければ。

そう思い、SIMカードに記録があるかどうか探っていく。しかし、空っぽだった。

「変なケータイだなあ」

ベッドに寝転がったユキトは仰向けになって、かちかちと携帯電話をいじくっていった。SIMカードにはなんの記録もないのに、なぜ、ダブルピース画面だけが立ち上がっているのだろう。

そして、ユキトは寒気を覚える。電話番号が異様だった。

9999999999999999

凍りついた視線が液晶画面の11桁の9から離れなかった。拾ってはいけないものを拾ってしまったのかもしれない。

ユキトが画面を待ち受けに戻した。ダブルピースの女性の笑顔がやたら怖くなった。

ピンポン、と、呼び鈴が鳴って、ユキトは肩を跳ね上げた。携帯電話を持つ手が震えた。起き上がる膝が笑っていた。

まるで、他所の家に侵入したかのような忍び足で、ユキトは玄関口までやって来、覗き窓に片目をあてた。

なんだ。運送会社の配達員だった。

ユキトは扉を開けると、チョークの「もっとエコしましょ！」DVDが入った段ボールを受け取り、扉を閉めて鍵をかけると、部屋に戻った。

にやにやと笑みを浮かべながら段ボール箱をむしり開けていく。

ちら、と、絨毯の上に置いていた携帯電話を見た。開けていく手を止めた。

「どうしよう」

不気味な携帯電話が気になって、もっとエコしましょどころではなかった。

触らぬ神にたたりなし。でも、ユキトは再び携帯電話を手にしてしまった。いろいろといじくった。しかし、判明できることは何もなく、やはり、知り得た情報は11桁の9だけであった。

いや、いまさら気付いた。待ち受け画面の右端に、小さいスマイルマークのアイコンがある。ユキトの携帯電話にはこんなものない。十字キーをアイコンに合わせてみた。ユキトはしばらく迷ったさえ、スマイルマークのアイコンに決定キーを押した。

ユキトは新たに出てきた画面に目を疑った。

ココネ設定画面

？ ココネ彼女モード

ココネがあなたの彼女になるよ！ これであなたも町を歩けば「うわあ、あいつが連れてくるカノジョ、めっちゃ可愛いじゃんかよお、くそお」って、振り返られること間違いなし！ ピースピース！
？ ココネ天使モード

ココネがあなたの天使になるよ！ ま、もともとが天使なんだけどね。でも、天使モードにすれば、ココネがあなたの願いを3つかなえてくれるかも！ ピースピース！

？ ココネ神モード

ココネが神様になるよ！ 神様になったココネが何をするかは、その日のココネの気分次第！ ピースピース！

※ココネはサイボーグのため、むやみに叩いたり揺らしたりすると故障の原因になります。取扱いには十分ご注意ください。

ユキトは啞然として画面を眺めていた。整理するまでに時間がかかった。

そもそも、SIMカードは誰かが作成したイタズラ品なのだろうか。しかし、SIMカードを設定するぐらいの技術がある者にしては、雑なイタズラだ。

サイボーグ。

ココネというのは、この待ち受け画面の女性のことを言っているのだろうか。

「彼女モードかあ」

半ば恐ろしいが、半ば興味が湧いてしまった。もしも、もしもである。これがイタズラでなかったとして、仮に今の科学技術が自分

の知らないところで発展していたとしたら、ココネというガツキー
似のサイボーグが自分の彼女になってくれる。

「本当かなあ」

などと言うわりに、ユキトの口許は緩んでいた。すっかり、科学
技術はそこまで発展しているのだと決めつけ始めた。

かれこれ二十三年生きてきて、彼女などという代物を扱ったため
しが一度もないユキトであった。

オリカ様に没頭できているのもそのせいだ。彼女なんてのは、ユ
キトにとっては都市伝説か、別次元の話。しょせんは、はるか頭上
に住む雲上人たちの日常なのだから、アイドルのオリカ様を求める
雲を掴むような日々にもなんら疑問はない。

むしろ、オリカ様とは握手会で触れられる。異性に触れることが
できたのは母親を除けば、オリカ様が最初で最後なのだった。

そんなユキトだから、最初にあつた恐怖心は微塵も失せてしまつ
て、好奇心だけが先立っている。

十字キーを操るユキトの指先はなんの迷いもなく彼女モードにカ
ーソルを合わせ、ボタンを押させた。

設定が完了しました！ ピースピース！

ユキトの胸は高鳴った。何が起こるのか。何が起こってしまうの
か。期待もあれば不安もあった。

推測が間違っていないければ、待ち受け画面のガツキー似の女の子
が自分の前に現れてくれる。

ユキトはベッドに飛び込むと、掛け布団をぎゅうっと抱きしめ、
にやついた笑みを布団の中に押し込めた。

DVDの存在も忘れて、すっかり、その気になってしまっている。

ピンポン、と、インターホンが鳴った。

ユキトは飛び起きた。しばし、ベッドの上で固まり、耳を澄ました。強い風のうねりだけが聞こえてくる。

ピンポン、と、また鳴った。

ユキトはゆっくりとベッドを下り、そろり、そろりと玄関口に歩み寄っていった。

ピンポンピンポンピンポンピンポン！

インターホンにせかされて、ユキトは表情だけあわてた。鳴り響く音にはインターホンを押す者の強気な姿勢が感じられ、たじろぎもした。

どうしよう。

いまさら、ためらった。叩きつけるように鳴り響くインターホンの音で、扉に近づくことでさえ怖くなってきた。

やっぱり、何かおかしいんじゃないか。ユキトの足は一步進んで二歩戻り、彼の情けない性格が存分に発揮された。

そうこうするうちに、音が鳴り止んだ。ユキトの体も止まった。

扉の向こう側にある気配だけを感じ取ろうと、必死に息を止めた。

気配は、ない。

そのとき、バキッ、と、何かが折れた。ドアノブ辺りからだった。多分、鍵だった。

扉が開いていく。

ユキトはただただ突っ立ったまま、なんのしようもなかった。

「早く開けてよね」

と、開いた扉の向こう、栗色のロングヘアーに月光をまぶしながら眉根をしかめているブレザー姿の少女は、まがうことなく、携帯電話の待ち受け画面の女の子であった。

紺色のブレザーに水色のリボン、チェックのスカート。高校生な

のだろうか、自分の家に帰ってきたかのようにさも当然に革靴を脱ぐ彼女の仕草は、サイボーグにはまったく見えないありふれた仕草であった。

それに、待ち受け画面の写真よりも可愛い。ユキトは戸惑いながらも突っ立ったまま彼女に見とれてしまう。

「何をやっているの」

玄関に上がってきた彼女はユキトの間近に立って無表情に見つめてくる。

「邪魔なんだけど。どいてよ」

「あ、あ、は、はい」

ユキトが道を開けると、ずかずかと部屋に入ってしまった彼女はガラステーブルの前に腰を下ろし、ショルダーバッグの中からノートパソコンを取り出した。

「あ、あのう」

ユキトが部屋の出入り口でそわそわとしながら訊ねると、四つん這いになってコンセントに電源プラグを差し込んでいた彼女は振り返ってき、

「ねえ。まさか、ネット回線は引きこんでいるんでしょうね」

と、ユキトの問いには興味を持ってくれない。

「あ、い、一応」

「あ、そう。ADSL？」

「光回線です」

「ビンゴ！」

彼女は人差し指をユキトに向けてウインクしてきた。

ユキトはなんだか圧倒されてしまう。

「データの送信量が膨大だからさあ、上ぼりの速度が必要なんだ」ノートパソコンを起動させた彼女は、ブレザーのポケットから取り出したヘアゴムを口にくわえると、長い栗色の髪を後ろにまとめ、それを結わえた。

「あ、あのう」

「LANケーブルはどこ」

「あ、いや、無線なんですけど」

ユキトの答えに、彼女はきつい眼差しを送ってくる。ハア、と溜め息をつく、と、シオルダーバッグからLANケーブルを取り出し、ルーターの在り処を訊ねてきた。ユキトが教えると、輪に束ねられたLANケーブルを放り投げてきた。

顎をくいと突き出し、繋げ、と暗に言う。

ユキトは言われた通りルーターとノートパソコンをLANケーブルで繋いだ。

そうして、彼女はふんふんと鼻唄を口ずさみながらキーボードを叩き始めた。ノートパソコンにケーブルを繋いだどさくさでユキトは彼女に近寄っていて、彼女のはす向かいに正座して、ディスプレイの向こうの彼女の顔を見つめる。

「あとう」

「何？」

答えたものの、彼女は鼻唄を続ける。口ずさんでいるのはおそらく、trfのBOYMEETS GIRLだった。高校生のくせに一昔前の歌じゃないか。

「あとう、コ、ココネさんなんでしょうか」

「違う。私の名前はアヤコ。ココネは開発ネーム」

「開発ネームですか……」

言葉を反芻し、この場で起きていることをなんとか飲み込もうとするユキトをよそに、アヤコは鼻唄と恐ろしいまでに素早い指さばきで、どこか事務的に、どこか愉快そうにタイピングしていく。

ユキトは訊ねずにはいられない。

「サ、サイボーグなんですか」

「あの子、今、忙しいから黙っていてくんない？」

素っ気ない。そのくせ、唄に乗せて細い鼻先を軽やかに揺らして

いる。

ユキトは不服な思いで口をつぐむ。

でも、起こっている出来事に胸を躍らせずにはいられない。

切れ長の瞼に被さる蒼い睫毛をひらひらとまばたかせ、頬にえくぼを刻んで鼻唄を口ずさむ彼女。白い肌と栗色の髪は、手を伸ばしたくなる衝動に駆られるほどみずみずしい。

存在だけで殺風景な部屋が華やいでいる。

「終わった。あとはデータを垂れ流すだけ」

アヤコは束ねていた髪を振りほどくと、ベッドに背中から飛び込んで、

「くーっ」

と、背伸びをした。

「あもう、質問、よろしいでしょうか」

「いいよ」

「サイボーグ、なんででしょうか」

「そうだよ」

「その、どのへんが、サイボーグなんでしょうか」

ユキトの問いにアヤコは起き上がり、ユキトに手を出してくるよう言ってきた。ユキトが右手を差し出すと、ベッドから下りてきたアヤコはユキトのゴマ目をじいと思つめながら、右手を握ってきた。すべすべしている。掌がふわふわと柔らかい。素人童貞のユキトはどきまぎしてしまう。

「水川幸人。二十三歳。山口県出身」

アヤコがユキトの瞳を見つめながらユキトの経歴を並べ立てていた。幼稚園、小学校、中学校に高校、初恋の相手、所属していた部活動、父親を十歳のときに亡くしたこと。

「好きな食べ物は母親の作ったビーフシチュー。嫌いな食べ物は鰹のたたき。好きなアイドルは五人組グループのチョークの館山折香」
全部当たっている。そうして、急に掌に電流みたいなのが走って、ユキトは叫びながら右手を離れた。

顔をしかめて掌を押さえるユキトに対し、

「今日から私がキミのカノジョなんで。よろしくね」

アヤコは首をかたむけながらにこっと微笑んできた。

ビーフシチュー（肉なし）

ユキトは一睡もできずに朝刊の配達に出ていた。

突然、現れたサイボーグ。突然、出来たカノジョ。

シャワーを浴びたいと言いつ出したアヤコ。サイボーグなのに？

「私の体の97パーセントが人間なの。あとの3パーセントは頭の中に入っている制御ユニット。わかった？」

わからないけれども、アヤコはシャワーを浴びた。浴室からもれてくる湯水の打つ音がユキトの下半身を大きくさせた。

まさか……。

「ねえっ！ バスタオル取って！」

刷りガラスの前にバスタオルを置くと、アヤコの細くて白い腕がバスタオルに伸びた。ユキトはめまいを起こしそうだった。

「おきらくごくらくー」

バスタオルで体を巻いたアヤコは、もう一枚のタオルで頭をかきむしりながら、ベッドの上に腰かけ、体育座りで下半身を隠しているユキトに、

「そーいや牛乳ないんだっけ？」

ユキトが戸惑いながらうなずくと、

「じゃあ、コンビニ行こっか」

と、アヤコは腰を上げ、クローゼットの中の洋服ケースから、ユキトの高校時代の体操服を取り出した。まるで、在り処を知っていた。

「あ、でも、湯冷めしちゃうから、ユキトが買ってきて。そうそう、歯ブラシもね」

ユキトはコンビニエンスストアに出向いた。帰ってくると、えんじ色の体操服に着替えていたアヤコはドライヤーを止め、早速、牛乳をコップに注ぐよう命じてきた。

牛乳を一息に飲み干したアヤコ。かーっ、と、喉を鳴らしてコッ

プを叩き置くと、鏡に向かい直し長い髪に丁寧に櫛を入れていく。

ユキトは部屋の隅でよそよしくカッププラーメンを食べた。

「言ってくればご飯作ってあげたのに」

ふいに振り返って来て言う。

「あ、いや、でも」

「何？」

「いや、その。カッププラーメン好きなんで」

「嘘ばかり」

と、鏡に戻って櫛を滑らせていく。

「ちゃんと知っているんだから。ユキトのこと」

射抜かれた。胸を。

広い野畑にせせらぐ小川の甘さ。春だ。風はゆらゆらと流れ、置き場のない広大な世界がユキトの前に広がったかのようだ。

たった、六畳半の洋間だけだ。

そこで女の子が髪を解かしているだけなのだけれど。

「私、寝るねー。配達がんばってねー」

歯を磨き終えたアヤコは、ベッドの中からユキトに手を振ったあと、掛け布団にくるまった。

ユキトは悶々とする。

これは一体どうするべきなのか、素人童貞のユキトにはわからない。とりあえず、シャワーを浴びた。再び部屋に戻り、二、三分ほどのあいだ、こんもりと膨らんでいるベッドを見つめた。

頭をかきむしった。

どうすることもできない。

テレビを点け、室内の明かりを落とすと、隅っこで丸まっていた。チョークのDVDを見ようかと思ったが、それははばかられた。

むにゃむにゃと寝言を立てながら、寝返りを打つアヤコに怯えつつ、ユキトは延々と青光りの深夜バラエティ番組をただただ眺めた。サイボーグ。

そんなことがどうでもいいことのように思えてくるほど、室内は

彼女の甘い香りが漂っていた。

一睡もせずに配達に出て、頭の中はさえざえとしているものの、終盤に差し掛かって来ると体が重くなってくる。

それに夜風が凍てつい。

でも、今日ばかりは配達をさっさと終わらせてしまいたくて、ユキトは寝静まった街中を駆けずり回る。

実は帰ってみたいないんじゃないか。

夢だったんじゃないか。

不安があった。逆に期待もあった。帰れば、あの可愛いサイボーグが部屋にいる。

最後の一部を軒先のポストに投函したとき、太陽が東の空に頭を出していた。冷たい空気を裂きながら、ユキトはフルスロットルでバイクを走らせ、店に戻って来た。

しかし、店前に一台のバイクが停まっていた、ユキトは顔をしかめた。イシバのバイクだ。三百部近い新聞紙を荷台に縛り付けるゴム紐をだらりと垂らしたままでいて、彼のだらしない性格が現れている。

たしか、今朝の九時までの電話当番はイシバである。

イシバに見つかったらしつこく絡まれてしまうから、ユキトはこっそり店の作業場に入ると、タイムカードをそつと手に取った。

「早えじゃんか、ドルオタ」

びっくりして振り返ると、朝日がうっすらと伸びてきた店内に、くわえ煙草のイシバがにたにたと笑いながら入ってきた。

手にはコンビニエンスストアの袋を持っており、あろうことか、電話番号のくせに鍵も閉めずに店の中を空っぽにし、朝食を買いに行っていたらしい。

「お前がこんな時間に帰ってくるなんて、珍しいな。雪でも降るんじゃないねえの」

と、イシバが煙草の煙を吹きかけてきて、ユキトはむせる。

見た目はそうでもない一般的な若者のイシバだが、自称、チバラギの爪弾き者だけあって言葉づかいも素行も悪い。

そのくせ、配達は早くて、勧誘の成績もいい。ユキトのあとから入ってきた人間だが、うだつの上がないユキトに「アイドルオタク」を略したあだ名をつけるありさまである。

「あはは。僕だってたまには早くやりたくなるときもありますよお」
ユキトは愛想で笑う。フン、と、イシバは鼻で笑い、吸殻を店内から路上に弾き飛ばした。

「配達もれしていたらただじゃおかねえからな」

と、配達忘れのクレーム対応はその日の電話当番の仕事なので、イシバは睨みを残してから事務所に上がり、がらがらと引き戸を後ろ手に閉めていった。

あまり、絡まれなかった。イシバの気が変わらないうちにと、ユキトはそそくさと逃げ出す。

「おい！」

がらりと引き戸が開いて、ユキトは足を止めさせられた。

「さっきの吸殻、ちゃんと拾っていけよ」

ぴしゃりと引き戸が閉まり、ユキトは小さな舌打ちをつきながら店前の吸殻を拾った。

チバラギの爪弾き者のせいで興が削がれてしまったユキトだが、店から百メートルも歩かないうちに、足取りは軽やかになった。

朝日がビルの角に反射する。幹線道路は冷たい空気にしんと静まり、薄い青空に煙のような雲がたなびいている。

朝だ。雀が鳴いている。

瞼の下は重いし、体の節々は若干きしむけれど、胸の期待と不安が睡魔を追い払っていた。

いるのか、いないのか。

どっちなんだ。

「おかえりー。おつかれさまー」
いた。

扉を開けたところ、すぐに視界に入ってきた。アヤコは栗色の髪を後頭部に束ね、えんじ色の体操着姿でキッチンに立っていた。

何かがぐつぐつと煮込まれている音。思わず腹が鳴ってしまいう香ばしい匂い。

「えっ」

ユキトは戸惑った。戸惑ったが、にやにやと頬を緩めてもいた。

「お、起きていたの」

「もうちょっと待ってて。コンビニで買ってきたありあわせだから口に合うかどうかわからないけど」

アヤコは鍋の中をすくったお玉を唇に寄せていく。

「うん。わたくし的には上出来かしらん」

ユキトは頬の緩みを押さえられない。重い瞼をごしごしと両手で擦り、もう一度、目の前を見てみる。

自分の体操着を着ているカノジョがいる。

「そこで何やってんの？」

細い眉をひそめてきたので、ユキトはあわてて部屋の中に上がった。

「あ、私が邪魔なのか」

アヤコが腰を引いたので、ユキトは狭い廊下をすり抜けていく。しかし、触れた。腕がつかえた。

「あっ、ご、ごめんなさい」

と、あわてて腕を引いたが、アヤコが笑いながら尻を突き出してきて、ユキトはアヤコの小さい尻と壁に挟まれた。

ぐりぐりと尻を押し付けてきながら、アヤコははしゃぎ声をあげる。

「ちょ、ちょっと。痛いよ」

でも、ユキトの頬は緩みっぱなしである。アヤコの柔らかい尻肉を腰骨にしっかりと感じることも忘れない。なんなんだろう、この

幸福は。

ラブラブじゃないか。

「いつまで、でれでれしてんの！ 邪魔なんだけど！」

急に襟首を掴まれて投げ飛ばされた。部屋の中に転げ回り、ユキトは唾然として、アヤコを見つめた。一瞬だったが、物凄い力だった。

アヤコはふんふんと鼻唄を口ずさみながら鍋の中をかき回している。

ユキトはおとなしく着替える。襟首をさすりながらテレビを点けて、朝のニュースを眺める。ちらちらとアヤコを見やっていると、炊飯器がピーピーと鳴った。

「できた」

ユキトの前に並べられたのはビーフシチューだった。

「お肉がないからただのシチューだけど」

ガラステーブルに頬杖をついて、にこにこ微笑んでいるアヤコ。じゃがいも、にんじん、マッシュルーム、スプーンですくうと、とろとろに溶け込んだ玉ねぎ、香り立つ湯気からはトマトのかすかな酸味が漂ってきた。

胃がぐうぐうと鳴った。

「早く食べれば」

「い、いただきます」

と、スプーンを口の中に運んだ。

あつ、と、思った。牛肉はないが、母親が作ってくれたそれと同じ味だ。

ふふん、と、アヤコは鼻を鳴らした。

携帯電話のアラームに目を覚ますと、アヤコの姿がなかった。ただ、シヨルダーバッグはある。

ビーフシチューを食べた後、キッチンからの片付けの音を聞きな

がら、いつのまにか眠ってしまった。

どこに行ったんだろう。

とはいえ、あと十五分で正午である。店に出勤しなくてはならない。ユキトはあわてて新聞店の防寒ジャンパーを羽織ると、部屋を出た。

正午から夕刊配達の十四時半までは勧誘の時間であり、その始まりには毎度ミーティングという名を借りて、店長からノルマを押し付けられる。

憂鬱だ。目覚めのアヤコもいなかったし。

鋭い冬風をかいぐりながら店にやって来て、明朝の折り込み広告をまとめている機械が、がしゃこんがしゃこんと店内に響き渡らせる中、ユキトはタイムカードを差し込み、事務所に上がった。

すでに同僚の配達員たちが事務机を寝ぼけ眼でぐるりと囲んでいる。ちなみに電話当番は昼間の勧誘が免除されるので、イシバの姿はない。

店長の挨拶からミーティングが始まり、まず、今朝の配達忘れが報告された。

「今日是一件。水川君」

「えっ」

ユキトは声を上げてしまって、店長に睨みを向けられた。

「えっ、じゃないよ。えっ、じゃ。せっかく早く配達をしても配達もれしていたんじゃないじゃんか」

「す、す、すいません」

がつくりと首を垂らす。好事魔多し、とは大袈裟だが、いかんせん、アヤコというカノジョが出来た幸福のあとに叱りつけられるのはなかなかこたえる。

「で、営業のほうだけど」

店長の言葉に空気が重たくなった。

「進捗度が悪すぎるんだよね。てか、やる気あるのかないのかわからないよ。昨日なんて、石場君の一件だけじゃないの。これじゃ、

進捗度を壁に貼り付けている意味がまったくないでしょ。わかってんの？」

ユキトならず、他の同僚たちもいちようにして視線を伏せる。

店長の文句が長々と続く。

ユキトは心の中で溜め息をついた。どうして、こんなに厳しいのだろう、と。雨にも風にも負けずに配達しているだけでも体はくたくただというのに、ノルマの圧力は雪だるまのように日ごとに増えていく。

そもそも、配達員として上京したのであって、求人広告には営業を強制させられることなど書かれてなかった。

もし、勧誘営業をさせられるのだったら、口下手のユキトは応募しなかったのだ。

「聞いているの、水川君」

「あ、あ、はい」

じつとりと蛇のような目で店長に見つめられる。

「水川君、今日は一件上げてくるまでやってもらうからね。夜中までやってもらうからね」

「えっ」

「えっじゃないよ。えっ、じゃ。水川君は今月に入って一件も上げてきてないじゃないか。やってもらうって言ったらやってもらうからね」

名ばかりミーティングが終わり、ユキトはとぼとぼと店の駐輪場に出た。バイクを路地までからからと押して行き、一度、長々と溜め息をつく。

無理だ。なんていうブラック企業なんだ。

とはいえ、やらないと帰してもらえない。せつかくカノジョが部屋にいるのに帰れない。ユキトは以前に新聞を取っていたことのある顧客名簿にじっと見入った。

何度も穴が開くほど眺めた名簿である。いまさら、どうにかなるものでもなかった。

が、一件、あてにできそうな家があった。一度、勧誘を断られた家だったが、今は他の新聞を取っていて、時期が来れば変えてもいいようなことを言っていた。

気のよさそうな若い奥さんであった。

ユキトはバイクのキックを踏み下ろしてエンジンをかけると、まっしぐらに「築田さん」の家に向かった。

あの奥さんだったらなんとかなるかもしれない。ごり押しすれば、他の新聞の契約が終わる月からの契約を前もってもらえるかもしれない。

あとは、ユキトにごり押しできるかどうかの話なのだ。

築田さんの家は鉄筋造り三階建てで、小金持ちのにおいがぷんぷんと漂っている。屋上には観葉植物が並んでおり、玄関先には色とりどりの花が並んでいた。

ユキトは緊張しながらインターホンを押した。

しばらくすると、スピーカーから奥さんの声がしてきた。

ユキトが、前にも一度来た新聞販売店の者で、たっぺのお願いをしにやって来たと伝えると、気のよい奥さんは「ちよつと待ってくださいね」との言葉を渡し、インターホンを一度切った。

普通なら、門前払いが当然なのだが、わざわざ玄関先にまで出て来てくれるということは脈がある。

ここでごり押ししなければ帰れない。せつかくのらぶらぶライフを地獄の時間に費やしてしまう。

ユキトが塀の向こうで直立不動でいると、ドアが開いて、赤ん坊を抱いた奥さんが出てきた。

「あ、あ、あ、す、すいません、お忙しいところ」

と、口下手なユキトは上がり症も発動させてしまっ言葉もおぼつかない。

「いいえ。こちらこそ何度も来て頂いて。ねえ、駒ちゃん」

奥さんは抱いている赤子の小さい手を持ち上げて、ユキトに振っ

てきた。これは獲得だと思って、ユキトはおぼつかないながらも新聞を取ってくれるよう頼んだ。

「ええ。いいですよ。この前、夫と話したんですけど、私に任せよう言われましたから。次に来たら、契約をお願いしようと思っていたんです」

「あ、あ、ありがとうございますっ!」

まさか、であった。ユキトはかつてない角度で頭を下げた。幸運このうえない。これもアヤコの御利益だろうか。まるで、世界が百八十度変わったかのようだ。

「じゃ、じゃあ、け、契約書に書いてもらってもいいですか」「ええ。いいですよ」

ユキトは肩から下げていたショルダーバッグの中をあわててかき漁った。思いもよらない唐突さで、手もおぼつかなかった。

「ゆっくりでいいですよ」

女神だ。微笑んでいる。

「なんだ?」

と、背後から声がして、ユキトは振り返った。そこには黒と茶色のチワワ犬それぞれ二匹を従えた中年の太った男がいた。

「誰だ、お前は。おれの家に何の用だ」

中年の男はユキトが手にしている契約書に怪訝な視線を送っている。築田さんはどこかの社長なのだろうか、男はやたら貫禄があり、まして、黒いチワワのほうはユキトに向かって牙を立てながらグルグルと喉を唸らせている。

「あ、お義父さん。こちらは新聞屋さんですよ。新しく変えようと思っ

「なんだと?」

不穏な気配にユキトはあせった。

「なんで、新聞なんか変える必要があるんだ」

主人らしき中年男は若い奥さんを睨みつけた。

「勝手な真似をするな。この家はおれの家だ」

「そんなことおっしゃったって、お義母さんにも太郎さんにも了解をもらいましたし、お義父さんは出張ばかりで家にはいらっしやらないじゃないですか」

「駄目だ！ 帰れ！」

ユキトは怒鳴りつけられたうえに、黒い凶暴チワワに吠え立てられて路上に尻もちをついた。

「帰れ帰れ帰れ！」

太った主人が怒鳴り散らすたびに、黒チワワが目を吊り上げながらきんきんと吠えてきて、ユキトはあたふたとバイクにしがみ乗ると、一目散に逃げた。

夕刊の配達が終わって、店に戻って来ると、作業場の出入り口でイシバがくわえ煙草で仁王立ちしていた。

「テメー、やっぱり配達忘れしやがったじゃねえか」

「す、すいません」

「おれの安らかな休息を奪い取りやがって。コーラのペットボトルおこれ」

「はい……」

自動販売機から出てきたペットボトルを差し出すと、それを奪い取ってイシバは店の中に入らずかと入っていった。

西日を往來の車が跳ね返している。

結局、勧誘の成果も上がらず、罵られたうえに百五十円を失い、見通しの立たないたった一件のノルマがそそり立っている。

駄目だ。ユキトは勧誘に出かけるふりをして、バイクを自宅のマンションまで回した。どうせやっても無駄なんだから、サボろう。

部屋ではアヤコがノートパソコンに向かい合っていた。

「おかえりー」

迷彩色のズボンにワインレッドのタートルネックのセーターを着ていて、部屋の隅には洋服店の紙袋やスーパールのビニール袋が大量に置かれている。

「って、仕事の時間じゃないの？」

と、顔を向けてきたアヤコはツインテールに髪を結っている。

「いや、ちょっと、休憩を」

ユキトは溜め息をつきながらベッドに腰かけた。不思議そうにユキトを見つめるアヤコ。

「どこか行っていたの？」

「買い物。てか、休憩って言って、ただのサボりなんじゃないの」

「いや、その」

じいっと見つめられて、ユキトは頭をかきむしる。カノジョなのにいちいち厳しい。アヤコが部屋にいたことを確かめたときは、安堵に近い心の休まりを感じたが、アヤコは気の強い性格らしい。

「手、出してよ」

「あ、いや」

「出しなさいよ」

詰め寄られて、ユキトは渋々右手を出した。じいっと睨んでくるまま、ユキトの右手を握ってくる。

電流みたいなものが掌に走って、ユキトは顔をゆがめながら手を引っ込めた。

「ふーん、そういうこと」

ユキトは首を垂らす。どうやら、手を握るだけで、相手の何かが見通せるらしい。

「たった一度、追い返されただけであきらめちゃうなんてさ」

アヤコはノートパソコンに向き直り、キーボードを叩いていく。

「情けないったらありやしない」

「そんなこと言ってたって」

アヤコが再び睨みつけてきていた。ユキトはちらと見やって、また、首を垂らす。

「辛気臭い。キミがそんなんだと、全然おもしろくないじゃない」

「そんなこと言ってたって」

「もうっ。だったら、私についてきなさいよ！」

アヤコは迷彩色のジャンパーを羽織ると、ベッドに腰掛けているユキトの腕をぐいと引き上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5566t/>

サイボーグガール～もっとエコしましょ！～

2011年6月1日01時10分発行